

はじめに

東京大学史料編纂所長・教授 山家浩樹

幕末に始まる日本の写真史において、ガラス乾板かんばん(以下、乾板と略す)は、もっとも長く活用された記録媒体である。民間・産業・学術の分野に関わらず、幅広く活用されたことは周知の事実と言えるだろう。透明なガラス板に写真感光材を塗布したその形状は、形態的に非常に安定していたため、一般にはフィルムが使用されるようになって、学術的な場面では引き続き重用されてきた。結果として、東京大学はじめ主要な研究機関にあっては、およそ1880年代から1960年代に至るまでの膨大な乾板コレクションが、研究室や書庫あるいは倉庫に眠っているはずである。近代学術の足跡が確実に刻まれた貴重な存在とは知りながら、乾板を使った経験のない世代にとっては、取り扱いに窮する存在であり、積極的な保全や活用はなされてこなかったと言わざるを得ない。

他方、21世紀に入ってすでに20年近くを過ごした現在、20世紀以前の諸学界が蓄積したこうした研究資源に対して、少なからぬ眼差しが集まりつつある。専門分化や細分化のなかで、学術全体が得も言われぬ停滞感や閉塞感に苛まれている今日、諸学は自ら歩んできた足跡を再検証しようとしているのかも知れない。近年のガラス乾板をめぐる諸機関の取り組みは、やはりこうした文脈のなかに位置づけられると言ってよいだろう。同様に、東京大学史料編纂所(以下、史料編纂所または本所と略す)においてもまた、この数年来、所蔵乾板をめぐる取り組みを行ってきたところである。

手探りで始めた作業ながら、中途より本書編者のお一人、高橋則英氏(日本大学芸術学部写真学科教授)に監修を仰ぐことで、一定の手続きを固めることが叶い、経験を積み重ねつつある。さらに白岩洋子・山口孝子・三木麻里各氏ほか、写真に精通する専門家からのご助言もあって、調査や分析の精度は確実に高まってきたと言えるだろう。また学内外に呼びかけて催した研究集会では、同様の課題に直面しながら様々な取り組みを実践されている方々との連携を築くこともできた。しかしながら、こうした広がりの中で却って感じるようになったのは、乾板を取り扱うための総合的な方法論は必ずしも確立していないという

事実であった。もちろん物理的な実体としての調査・分析・保全方法という点から言うならば、専門分野としての写真学が精緻で確実な手続きを提示している。しかしそれは乾板の作成過程や被写体の詳細といった、当該資料群を生み出した学術的な動機や背景を必ずしも前提とするものではない。学問分野ごとに異なる固有の事情・状況をふまえながらも、より普遍的に乾板を学術資源として活用するための史料論が今日俟たれていると言ってよいだろう。

こうした問題意識を踏まえつつ、本書においては、史料編纂所における取り組みを客観的に総括し、かつより広い関わりの中かで経験を共有・発展させることを目指したところである。編者による協議の結果、全体の構成としては、ガラス乾板の取り扱いに関する実践的なレポートである第Ⅰ部・第Ⅱ部を中軸に据え、さらに写真史の大局からガラス乾板の歴史・意義・保全を論じる総論と、人文学における写真の活用、とりわけガラス乾板の蓄積過程を扱う第Ⅲ部を設けて、多岐にわたる専門領域からの寄稿をお願いした次第である。唐突なお願ひにも関わらず、宮崎幹子・岡田愛両氏には、それぞれご所属の奈良国立博物館・京都国立博物館における実践を詳細に論じていただいた。加えて資料館・文書館の立場から小島浩之・新井浩文の両氏にご寄稿いただいたことも大きな成果である。多様な分野から自由に論じていただいたことで、本所における作業を相対化し客観的に見つめ直すことができたばかりでなく、普遍的な史料論にむけた第一歩も刻むことができたのではないかと自負している。

また巻末には、ガラス乾板を理解するうえで必須となる用語集や、各種の規格集・参考文献リスト・国内主要所蔵機関一覧・保存用品取り扱い業者の一覧など、実務にあたって有益と思われるものも収録した。本文とあわせて有効に活用いただければ幸いである。乾板を所蔵する多くの機関・個人におかれては、その整理・保全・活用にあたって種々のご苦労されている旨を仄聞する。そうした方々にとって、本書に収録された様々な経験・知見が何らかの参考となることを願うところである。

さてそもそも史料編纂所が、なぜ多くのガラス乾板を蓄積し、如何にその保存と活用へと歩みを進めるに至ったのか、研究所を代表する身として、その経緯をかいつまんで述べておかねばならないだろう。

もとより史料編纂所の主たるミッションは、その名のとおりに日本史史料集の編纂・刊行にほかならない。明治の初めから事業に着手し、現在の活動スタイルに落ち着いて既に120年、今も『大日本史料』『大日本古文書』『大日本古記録』といった叢書名のもと、毎年10冊前後の史料集を刊行している。編纂にあ

たっては、全国に所在する史料を遍く訪ねて記録するという作業が不可欠であり、こうした作業を歴史学では史料探訪と呼んでいる。探訪は1890(明治23)年頃から本格化した。当初より史料原本を入手するのではなく、精密な複製を作ってこれを蓄積するという方針をとってきた。複製は、もとより人の手で書写することを旨としていたが、史料集の刊行を開始した1901(明治34)年前後から、ガラス乾板を用いた写真技術を導入し、1908(明治41)年の写真室設置以降、それが本格的に展開することになった。以降1960年代にマイクロフィルムに置き換わるまで、ガラス乾板は連綿と利用され、最終的には2万枚前後の乾板を蓄積するに至ったと推定されている。しかし、乾板自体は直接閲覧に供される対象でなかったこともあり、媒体がフィルムに移行すると次第にその管理体制は緩んでいった。加えて1969(昭和44)年の東大紛争に際して、その一部が破壊されてしまったことで、史料群としての秩序は失われ、以後数十年手つかずのまま歳月を過ごすことを余儀なくされたのである。

その後、図書職員を中心に何度か秩序を復元しようという動きもあったが、日の目を見ることはなく、再び関心が甦るには1997(平成9)年の附属画像史料解析センター発足を待たねばならなかった。同センターは、肖像画・絵巻・古絵図・古写真といった従来の文献史学が捉えきれなかった史料群を対象として、当時隆盛しつつあったデジタル技術を援用し、歴史学の立場から新たな分析を進めることを目的としていた。その設立と同時に「古写真研究プロジェクト」が組織されたことで、ガラス乾板は漸く研究・分析の対象となり、保全と研究が開始されることになった。しかしこの段階にあつては、現存する乾板1万3000点余を、総体として整理・分析するには及ばず、写された史料が消滅してしまったものなど、特別な事情のある乾板に限定して、試験的な取り組みを行うに止まるものであった。

だが2006(平成18)年になると、史料編纂所はこのガラス乾板群と決定的に向き合うことを余儀なくされる。というのも収蔵庫・書庫を擁する研究棟が、現行の耐震基準を満たしていないことが判明し、改良工事のため所蔵史料や蔵書の全てを外部に退避する必要に迫られたからである。点数を確認する目録もなく、秩序や配置も判然としない乾板群を前に、所として緊急の対策を講じることに迫られた次第である。その後、大学構内にスペースを確保することが叶ったことで、大規模な移動を伴わず工事期間をやり過ごすことができたものの、ガラス乾板の再秩序化とその保全は、解決すべき重要課題として認識されることになったのである。そこで耐震対応が完了した2009(平成21)年、古写真研究グループ・写真担当技術職員・耐震対策担当者らを中心に協議を重ね、翌年度

から画像史料解析センターに「本所所蔵台紙付写真・ガラス乾板に関する研究プロジェクト」(代表 久留島典子)を組織し、事業遂行の体制を整えた。幸いなことに翌2011(平成23)年度には、高橋則英氏を同センターの客員教授にお迎えすることが叶い、専門的見地から継続的にご指導いただける便宜を得たことの意味は極めて大きい。あわせて同年、科学研究費補助金・基盤研究(A)「ボーンデジタル画像管理システムの確立に基づく歴史史料情報の高度化と構造転換の研究」(研究代表 山家、～2014年度)が採択されたことで、調査データの蓄積・共有・公開方法に関する研究についても着手する運びとなった。以降、上記の研究プロジェクトと科研グループの共同体制のもと、所蔵乾板の調査・再秩序化および情報化は、今日に至るまで継続しているところである(科学研究費については、2015年度から基盤研究(A)「原史料メタ情報の生成・管理体系の確立および歴史知識情報との融合による研究高度化」が採択となった)。

史料群の壊れた秩序を復元するというミッションを進めるにあたり、並行してもう一つの再発見があったことを述べておきたい。東京大学を象徴する赤門のすぐ南脇には、史料編纂所が1916(大正5)年から書庫として利用してきたレンガ作りの耐火鉄筋建物、通称“赤門書庫”が存在した。本館からやや離れていることもあって、戦後は主として役目を終えた公文書類の保管庫となっていた。ガラス乾板の再秩序化作業を本格化させた2011(平成23)年に、この書庫が大学本部の手によって、全学施設としてリニューアルされることが決まり、収蔵品を回収のうえ整理・保存を図る必要に迫られたのである。これまでその存在は認識しつつも、本格的に向き合うことを避けてきた明治以降の膨大な文書群に、否が応にも取り組まざるを得なくなった。これには所内に組織された別のワーキンググループが対応にあたったが、複製作成を目的として原史料を貸借した際の公文書類については、前述の科研グループがこれを引き取り、分析・保存・情報化を進めることになった。当該書類は「往復」と呼ばれる厚い簿冊に綴られ、その総数は430冊余を数えている。1895(明治28)年以降、1951(昭和26)年に至るまで、そのほぼ全てが揃っており、史料所蔵者と取り交わされた貸借書類が時間軸にそって収められている。ガラス乾板を含む、史料編纂所の膨大な複製史料群の来歴を紐解くうえで極めて貴重な存在と言えるだろう。現在、この「往復」の解析・情報化を進め、ガラス乾板ほかの複製がいつどのような経緯で生成されたのかを追跡しているところである。データ量が膨大であるため、遅々たる歩みではあるが、漸く乾板群の秩序復元への筋道が見えてきたという段階にある。

2009(平成21)年度から着手した、乾板を対象とする一連の作業は、実のところ

ろ、まだ道半ばにも達していない。何らかの保存措置を加え、コンディションレポートを作成しえたのは、まだ2,100点ほどで全体の2割弱にとどまっている。また秩序の復元も緒についたばかりである。こうした現状において、本書を編むことについては、時期尚早と感ずるむきもあるだろう。所内の関係者も大方そうした意識であったが、2014(平成26)年1月、所外の専門家も交えて小規模な研究会を行った際に、大量のガラス乾板を組織的に整理・保全・分析する作業は全国的にまだ希少なことで、そのなかで確認される事案・事象は、なるべく早くかつ広く発信すべきことなどを強くご指導いただいた。これに従い、同年11月に画像史料解析センターの研究集会として「ガラス乾板の調査・保存・研究資源化に関する研究」を開催したところ、全国の80を超える機関・法人から150名を越える参加者があり、改めてご指摘の意味を実感するに至った。こうした状況をふまえて本書をまとめることを判断した次第である。今後とも、事業の進展にあわせて、こうした報告・発信の機会を設けてゆくことで、研究機関としての責めを塞いでゆきたい。

ここまで史料編纂所とガラス乾板の関わりについて縷々述べてきたのだが、翻って今日のガラス乾板のおかれた学問的状况から、本所所蔵史料群の位置づけを俯瞰しておくことにしたい。まずなにより指摘しなければならないのは、ガラス乾板が国重要文化財として指定されるようになったことだろう。本書がタイトルに「文化財としての」と掲げたのも、これによっている。評価のポイントは、ガラス乾板そのものの希少性というよりは、そこに写された図像に対する評価であることは言うまでもない。近年指定となったものを示すならば、

- * 琉球芸術調査写真(鎌倉芳太郎撮影)(2005(平成17)年)
- * 法隆寺金堂壁画写真ガラス原板(2015(平成27)年)
- * 東京国立博物館所蔵臨時全国宝物調査関係資料(2016(平成28)年)

になるだろう。いずれも過去のある時点における文化財・史資料の状況を、調査・研究の過程で撮影したものであるが、前二者と後者では質的な変化を見ることができよう。琉球の文化財ならびに法隆寺金堂壁画は、周知のように戦災や不慮の事故によって既に失われおり、乾板に写された像が、その在りし日の状態を伝える唯一無二の存在である。これらが学術的に高い評価を得ることはある意味当然のことである。

他方、全国宝物調査の記録においては、その被写体に現存するものが多く含

まれており、評価の基準は明らかに異なっていることが窺われる。すなわち被写体の存否のみならず、ある時点の調査情報としての図像が、学術的に貴重かつ有用と判断されるに至ったことを示すものである。こうした趨勢は、近代以降に写真技術とともに展開した、文化財や史資料を対象とする調査・記録への評価が、社会的に大きく高まったことと直結している。文化財・史資料の現況を正確に理解するためには、それがどのような来歴をもって今日に至ったのかを把握することが不可欠であるのは言うまでもない。基礎的な調査情報を学術資源として適切に評価し、かつ活用することで、文化財保存技術や人文諸学の発展につなげようとする潮流が、ガラス乾板を文化財として明確に位置づけるに至ったと言ってよいだろう。

こうした趨勢をふまえると、史料編纂所が所蔵するガラス乾板群の価値は、改めて明確になってくる。過去のある時点の客観的指標として、被写体の図像を確認するという点が重要であるとするならば、「往復」をはじめ複製生成に関わる豊かな情報が存在する史料編纂所の現況は、極めて恵まれている。いつ誰がどのような文脈において作成したのかを1点1点明確にしてゆくことで、その価値をいよいよ大きくしてゆくことができる。あわせて写真技術史的な分析から、個々の乾板が、どのような技法でいかなる条件のもとに撮影されたのかについても明確になるのであれば尚更であろう。

また現在、我々が加えている保全措置や修復の手続きについても、後に第三者が参照することが可能となるよう、明確に記録しておくことも忘れてはなるまい。保全・調査・研究という連続して行われる営みそのものが、後に貴重な学術資産となってゆくという文脈に立つならば、我々の振る舞いも欠くべからざる履歴情報となるからである。

先にも述べたように、本書はようやく歩みを始めた作業の一端を紹介するものにすぎない。しかしガラス乾板をめぐる学際的協業のあり方や、その方法論などについて、共有すべき論点が浮かびあがるとすれば幸いである。史料編纂所においても、所蔵史料について、専門を異にする研究者の方々と密接に協力・連携しながら、本格的な取り組みを行うのは、今回がほぼ初めてのことであった。この貴重な経験をふまえて、ガラス乾板の総体を明確にしてゆくとともに、今後他の多様な史料群についても同様に歩を進めてゆかねばならない。本書を契機として、さまざまな立場にある諸賢よりご助言をいただき、さらに多様なつながりを得てゆくことで、史料学・史料保存科学の発展に寄与できるよう努力を重ねてゆきたい。

も く じ

はじめに.....山家浩樹.....(1)

総論

- 第1章.....ガラス乾板の歴史と保存の意義.....高橋則英.....2
- 第2章.....写真と歴史学.....谷 昭佳.....20
 東京大学史料編纂所の活動を中心にして
- 第3章.....写真史料を保存へ導くために.....白岩洋子.....40

第 I 部.....ガラス乾板の保全と活用

- 第4章.....ガラス乾板の史料学.....谷 昭佳.....62
 整理保存と調査による研究資源化の実際
- 第5章.....ガラス乾板の取り扱い.....竹内涼子・高橋則英.....86
- 第6章.....ガラス乾板用保存箱の製作.....谷 昭佳・高山さやか・竹内涼子.....104
- 第7章.....ガラス乾板の劣化例証.....竹内涼子.....112
- コラム1.....ガラス乾板の「膜面返し」と
 コロタイプ印刷.....谷 昭佳(文責)・高山さやか(作図).....126
- コラム2.....ガラス乾板の劣化について.....山口孝子.....136
 ガラスの組成分解について
- コラム3.....損傷したガラス乾板の処置と修復.....三木麻里.....140

第II部……………ガラス乾板の情報化

- 第8章……………ガラス乾板のデジタル情報化……………高山さやか……………150
デジタル撮影とメタデータの作成
- コラム4……………ガラス乾板のスキャニングについて……………岡田 愛……………177
京都国立博物館の取り組みから
- コラム5……………ガラス乾板に関するデータはどこに向かうのか……………山田太造……………180

第III部……………ガラス乾板蓄積の経緯とその背景

- 第9章……………東京大学史料編纂所における
歴史史料の複製とガラス乾板……………井上 聡……………186
- コラム6……………日本史研究におけるガラス乾板の意義……………木下 聡……………202
保阪潤治コレクションから
- 第10章……………博物館と文化財写真……………宮崎幹子……………206
奈良国立博物館におけるガラス乾板整理の経験から
- コラム7……………東京大学経済学部資料室所蔵のガラス乾板……………小島浩之……………226
横濱正金銀行資料から
- コラム8……………文書館におけるガラス乾板の蓄積と公開……………新井浩文……………230

附録……………235

用語集・写真関連規格一覧・写真感光材料の標準寸法に関する一覧表・参考文献一覧・
ガラス乾板に関する情報・画像を公開している国内の主な機関・保存用品取り扱い業者一覧

おわりに……………久留島典子……………255

掲載図・写真の所蔵・出典一覧……………257

執筆者一覧……………259

【凡例】

- ・本書をより深く理解するため、巻末には用語集・参考文献ほかを附録として掲載した。
- ・附録のうち用語集に収録した語については、各章及びコラムにおける初出箇所「†」を付して明示している。
- ・掲載した図・写真の出典・典拠・所蔵等については、必要と思われる範囲において一覧を作成し巻末に掲げた。